

看護基礎教育における性に関する学習 男性患者の陰部洗浄に関する指導方法の検討

水野昌子¹ 福田博美*
Masako MIZUNO Hiromi FUKUDA

*養護教育講座

はじめに

わが国の看護職員養成に関するカリキュラムにおいては、1990年、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により「精神保健」において性の学習が初めて明記されたが、1997年の改正では、精神保健から性の学習が外され、各専門領域で性に関する学習を編成することが示され現在に至っている¹⁾²⁾。性の学習についての教育は、カリキュラムにおける位置づけと編成形態についての検討はされている³⁾ものの、各専門領域で教授する内容に触れたものは少ない。専門領域の基礎看護学においては、清潔の援助技術で教授される項目に陰部洗浄がある。しかし、これは、清潔の意味だけでなく、男性患者のペニスの勃起（以下勃起とする）といった性反応を引きおこしやすい看護行為であり⁴⁾、患者にとっては、恥となる経験でもあり⁵⁾、性的な意味合いをもつ看護行為である。この陰部洗浄は、学生が、基礎看護学実習（臨地実習）の中で最も遭遇することが多い清潔の援助技術の1つである。一方、臨地実習において、男性患者の陰部洗浄を実施することは学生にとって大きなストレスになっていることから、教員や臨床指導者の関わり方が問われている⁶⁾。また、看護基礎教育において十分な性に関する教育を受けていない学生は、臨床に出たから当惑することもある⁷⁾ことから、看護基礎教育において多くの学生が体験する陰部洗浄の技術を修得することは重要であると考えられる。

A校においては、女性の陰部洗浄の授業と校内実習を実施しているが、男性の陰部洗浄は、授業のみで校内実習はしていない。そこで、今回は、希望のあった学生に対して男性の陰部洗浄の校内実習を指導し、受け持ち患者の日常生活の援助の基礎を学ぶ臨地実習である基礎看護学実習でどのように効果があったのか振り返ることで今後の指導の一助としたい。

方法

1. 対象

A看護専門学校において平成18年1月16日から平成18年2月3日の間に基礎看護学実習をうけた1学年

の学生のうち、教員Aから実習前に男性患者の陰部洗浄の校内実習指導を受けた学生3名（以下女子学生A・B・Cとする）と受けていない学生3名（以下女子学生D・男子学生E・Fとする）。

2. 方法

データ収集には面接による半構成的面接法を用い、基礎看護学実習終了後、平成18年5月～9月に休憩時間に個室にて聴取した。聴取した内容は、録音はせずメモを作成し、面接後にノートに記録した。内容を事前技術練習の効果、実習中の陰部洗浄体験、ミーティングの効果にわけて分析した。

3. 倫理的配慮

本研究の趣旨を口頭で十分説明し、文書で同意が得られた学生を対象とした。説明の際には、個人の名前が特定されることはないこと、参加の有無や回答の内容によりその後の教育に不利益を与えないことを伝えた。また、面接で聴取した内容の記述について参加者チェックを実施した。

結果および分析

1. 事前技術練習の効果

1) 事前技術練習における教育内容
(1) 男性の性器の生理的特徴
(2) 男性患者の陰部洗浄の方法
(3) 男性患者の陰部洗浄時の勃起への対応方法
(4) 男性患者の陰部洗浄を実施する時の看護師の態度
(1)～(4)について教員Aが口頭で説明しながら、男性の陰部シミュレーションモデルを用い、臥床患者の陰部洗浄のデモンストレーションを実施した。その後、学生は、自主的に練習を重ねることで、技術を習得した。

2) 学生の発言

<女子学生A>

実施に対する不安が軽減されるし、実施後の振り返りのときの基準になる。

<女子学生B>

以前に露出狂の男性の性器を見たことが2回あり、男性の性器に対して、嫌なものというイメージがあったので陰部洗浄に対して抵抗感があった。授業では、

1 愛知教育大学大学院修了生

女性の陰部洗浄の校内実習しかしていなかったため、基礎看護学実習で男性の陰部洗浄をするということは予想していなかった。今回の事前技術練習においても、将来役に立つだろうと思って指導を受けたが、基礎看護学実習で実施することを知り、男性性器のシミュレーションモデルを用いて練習をしたことで男性性器に慣れることができた。うまくできるかどうかという不安は残るが、実施することに対しての心構えができた。

<女子学生C>

前の実習で男性の陰部洗浄の介助を体験した学生から話を聞いて、自分には絶対にできないと思って不安だったが、男性の陰部洗浄の事前指導を受けたことや練習したことで不安を緩和することができた。仰臥位の男性の陰部洗浄は方法が理解できていたので、あたふたとせずに指導されたことを思い出しながら、落ちついて実施することができた。しかし、ポータブルトイレでの座位による陰部洗浄については、経験や指導がなかったので戸惑った。学内実習では、男性の陰部洗浄の授業だけでなく実習があることが絶対必要だと思う。

<女子学生D>

男性の陰部洗浄は、いつも目に触れる部分ではない性器に触れる看護行為なので、男性性器のシミュレーションモデルで練習して慣れることで免疫が付き、やったから大丈夫という気持ちになるので、校内実習をしたほうがよいと思う。

<男子学生E・F>

校内実習では、女性の陰部洗浄を実施したが、男性の陰部洗浄を実施することで、その方法を理解することができ、イメージもつくので男子学生にとっても必要であると思う。

3) 分析

学生は、男性患者の陰部洗浄に対して不安や抵抗感をもっていたが、指導を受け練習したことにより男性性器に触れることに慣れるとともに方法が理解でき、不安や抵抗感が緩和された。また、基礎看護学実習において男性患者の陰部洗浄を実施することを実感し、心の準備ができ、実習に臨むことができた。しかし、技術指導を受けていないポータブルトイレでの陰部洗浄の実施には戸惑っていた。また、男子学生も女子学生もともに男性患者の陰部洗浄の校内実習の必要性を感じていた。

2. 実習中の陰部洗浄実施時の体験

1) 実習内容

学生は、実習において老年期の男性患者を受け持ち陰部洗浄の体験をした。

学生は、基礎看護学実習においては、陰部洗浄を実施する際には、主に実施する学生と副として介助を

する学生で行い、教員または臨床指導者（実習病院の学生教育担当の看護師）から指導を受けた。ただし、教員と臨床指導者が不在の時には、スタッフの看護師から指導を受けた。

2) 学生の発言

<女子学生A>

実施する前はできれば触りたくないけれど、看護ケアだから仕方がないと思っていた。2人の男性患者の陰部洗浄の体験をした。1人目の患者の陰部洗浄は、実施する前は少し嫌だと思っていたが、2人目の患者の陰部洗浄からは前回の患者が勃起しなかったため、慣れて勃起したらという不安はなくなった。恥ずかしくはなかったが、うまくできるかなという不安や勃起したらどうしようかという不安があった。1人目の患者の陰部洗浄を仰臥位で臨床指導者が実施するとき、洗浄液をかける介助をしたが、勃起は見られなかった。2人目の患者にポータブルトイレでの陰部洗浄を初めてすることになり、臨床指導者が一緒に入って指導してもらえるようになっていたが、急に他の用事ができ、看護師に指導を依頼された。しかし、看護師からは「自分で考えて患者に確認しながらやればできるでしょ」と言われ、驚いたがそれ以上何もいえず、実施する覚悟をした。できるかどうかかわらず不安だったが看護師の立会いの下でとにかく必死で実施したので自分の行動などの細かなことは覚えていない。時間がかかってしまったので患者に申し訳ないという気持ちはあったが、終わって『はあ、終わった』という感じで少し勃起したことには気がついたけれど『まあ、いいか』みたいな軽い気持ちだった。勃起したことについては、この年齢でもまだ勃起するんだと少し驚いたが嫌悪感はなかった。この日のことは、同じグループの学生Bに話し、少しは楽になったが、2回目の陰部洗浄に行くのは憂鬱だった。しかし、友人に話す程度ですっきりしたので、自分から教員や臨床指導者に相談する気持ちはなかった。2回目の陰部洗浄は、教員が立ち会ったが、細かく丁寧になくはと思い、きれいにすることに集中して行った。このときには、実習前に指導されたことはすっかり忘れていた。また勃起することを予感したが、高齢だしもうそろそろ大丈夫かなと思った。しかし、また少し勃起し患者も恥ずかしそうに下を向いていた。痴呆はなかったが難聴があり、大きな声で耳元で話さないと聞こえなかったが、陰部洗浄をしているときにはそれができず、実習前に指導されたような気持ちをそらすようなコミュニケーションをとるのが難しかったので、ほとんど無言で行っていた。陰部洗浄中にまた勃起がみられ『あっ、やばい、どうしようかな』と思い、肛門を洗うときにすこしゆっくりすれば治まるかなと思い実施したが変化はなく、『拭かなきゃ、また、刺激を与えるけど仕方がない』と思い陰部を拭いた。教員B

は違う話をしたりして患者の気をそらすようにしてくれたが、アイコンタクトなどで教員に助けを求めると、そのことを患者に気づかれそうで患者が嫌な気持ちになるのではと考え助けは求めなかった。実施後は、患者は私と目を合わせないようにしており、自分も「お疲れ様でした」とさらっと言って終了した。その後も毎回勃起が少し見られたが気にならなかった。今回はなかったが、陰部洗浄をした後に、教員や臨床指導者から学生に軽く患者の勃起について気にかける声かけがあるとよいと思う。

<女子学生B>

実習前は、男性患者の陰部洗浄をすることに抵抗感があったが、受持ち患者に必要な援助だと理解できたことにより、実施することへの抵抗感はなくなった。臥床した患者の陰部洗浄を最初は介助をしながら見学をして、臨床指導者から指導を受けた。最初の実施はスムーズにはできなかったが、臨床指導者から助言を受けながら実施できたので戸惑うことはなかった。回数を重ねることで慣れ、恥ずかしさが消失していったと思う。実施中に勃起することはなく、他の患者に介助で入った時も勃起することはなかったため、勃起がどのような状態なのかイメージできない。また、勃起するのは特別なことで自分が体験する不安はなかったのでその対応について深く考えていなかった。

<女子学生C>

2人の男性患者の陰部洗浄の体験をした。しかし、最初の男性患者は仰臥位にての陰部洗浄であり、校内実習での経験や見学もあり、自分の中ではやろうと思っていたので不安や抵抗などはなく実施することができた。男性患者の陰部洗浄を仰臥位で実施したが、勃起はしなかった。1回目は看護師が実施するのを見学しながら洗浄液を流す介助をした。肛門のほうまで丁寧に洗浄することを指導された。2回目からは学生が主で実施した。最初はどの程度の力で洗浄したり、持てば苦痛を与えずにすむのかがわからなかったが、回数を重ねることで理解できた。慣れてくると、患者の羞恥心を考えて早くやろうと考えて実施するようになった。しかし、もう1人の男性患者の陰部洗浄は、ポータブルトイレにおける座位での陰部洗浄で練習経験も見学もなく、イメージができない状態で実施したので戸惑った。さらに教員Bから、経済性を考えて綿花を使用するようにと指導を受けたが、陰部洗浄で一杯一杯なので混乱してしまった。ベットサイドのポータブルトイレの陰部洗浄は、狭い空間で患者の前にしゃがみこむような姿勢になり患者の性器にかなり接近するような状況で作業野が狭いことと陰部が見えにくいいため洗浄の動作がスムーズにいかないこと、臀部を洗浄するとき前腕が性器に触れることや洗浄液が飛散しやすいのでゆっくり行うことで時間がかかってしまうことから、勃起させやすくなると感じた。実

施中、患者の息遣いが荒くなり、少し性器が大きくなったため、もしかしたら勃起しているのかも思ったが、勃起がどのようなものかわからなかったこと、それ以上勃起することもなかったため、そのまま続けて終了した。終了後、介助をした女子学生から「少し勃起していたよね」と言われて初めて知った。勃起したことにはびっくりしたが、嫌悪感や抵抗感はなく割りきってできた。ペニスの先をきれいにしなくてはと思い込んでいたので丁寧に実施したことも刺激を与えてしまったと思う。とにかく、きれいにしなくてはと思っていたので勃起したことへの対応はまったく思いつかなかった。あとから、1年次の陰部洗浄の授業で学んだ勃起したときには温タオルをかけるという知識を思い出したがそのときはそんな余裕はなかったし、どのようにかけるのかタイミングがわからなかった。事前技術練習の中で、看護師が性的対象となることを聞いていたが、自分には遠い話で関係ないという気持ちでぴんとこなかったけれど、勃起されたことにより「こういうことなんだ」と実感した。勃起したのはそのとき1回だけだった。

<女子学生D>

受持ち患者は女性であったので男性患者の陰部洗浄の介助を実施した。陰部洗浄の実施時に学生2人、教員1人が入ることについて患者様の羞恥心を考えるとどうなんだろうと疑問に思った。ポータブルトイレでの陰部洗浄の介助をしているときに勃起していることに気づいたが、病気があるにもかかわらず、また年齢に比べ元気だと思った。陰部洗浄時、勃起するのは普通のことなのか、特別のことなのかわからなかった。しかし、教員Bがいつもなら、すぐアドバイスをくれるのに終始無言でアドバイスがなかったので、よくあることなのだと思った。ポータブルトイレの陰部洗浄は、学生と患者の性器との距離が非常に近くなり、性的な雰囲気や漂っていたことが気になった。実施した学生の化粧や香りが勃起を促す要因になるのではないかと思った。

<男子学生E>

仰臥位における男性患者の陰部洗浄を実施した。1回目は見学で2回目から実施した。見学時に臨床指導者から、汚れのたまりやすい亀頭は敏感なので注意してささっと洗い、陰囊の裏は洗にくいので石鹸が残ったり、水分の拭き残しがないようにすることや勃起しても気がつかないふりをして行うことを指導された。毎回、実施により軽度勃起していた。勃起し始めたことに気がつき、どうするか迷ったが、止めるのも不自然だったこと、それ以上勃起しなかったことと臨床指導者が何も言わなかったのでそのまま続けて終了した。実習だからという割り切り方をしているので陰部洗浄に対して特別な感情はもっていない。ただし、臨床指導者などから男性看護師や男子看護学生が拒否

されるということを知ったことがあるので患者が異性の場合、相手が嫌がらないかということが気になる。男性の陰部洗浄の校内実習は必要であると思う。実習中はできるようになるまで必ずそばにいて欲しいが慣れれば大丈夫である。心理的フォローは特別いらすが技術的フォローは欲しい。

< 男子学生 F >

仰臥位における陰部洗浄を実施した。1回目は見学で2回目から実施した。臨床指導者ではなくスタッフの看護師について見学したが、陰囊の裏は洗いきれないのできちんと洗うようにと指導された。勃起については、尿道カテーテルを挿入している人で注意する必要がなかったため指導はなく、勃起は一度もなかった。

3) 分析

学生は、男性の陰部洗浄を全員が体験しており、主に実施した学生が5名、副として介助のみ実施した学生が1名であった。事前技術練習を受けても女子学生は恥ずかしさや抵抗感を残すものの、患者を前にし陰部洗浄が必要な援助として理解が出来たとき、それらは無くなり、実施することができていた。

臥床している男性患者の陰部洗浄の方法について、事前技術練習をした学生もしていない学生も、実際の場面で上手に実施できるかは自信がなく不安を持っていた。しかし、初めて実施するときには、必ず全員が見学をして指導を受け、その後実施するときにも指導を受けたことで陰部洗浄の技術を習得することができ不安は無くなった。しかし、ポータブルトイレで座位をとる患者の陰部洗浄については、事前技術練習もなく、見学も受けずに実施していたことから実施方法に戸惑いが強くみられた。

陰部洗浄を実施する時は、どの程度の力で洗浄してよいのかわからなかったが、回数を重ねることで理解でき、露出を最小限にするなどの患者の羞恥心への配慮もできるようになっていた。

また、実施中は、清潔にしなくてはという気持ちが優先され、実施することに精一杯で勃起させないように注意することまで考えられなかった。さらに、どの状態が勃起しているのかが理解できない学生は勃起していることに気づけなかった。たとえ、勃起していることに気づいても、気づかないふりをすることはできるが、それ以上勃起させないように事前技術練習で指導されたことを活かしたり、その場で教員や臨床指導者より助言をもらって適切な対応をすることはできなかった。

これら以外に、陰部洗浄中の勃起に遭遇して、初めて高齢者の性について知り、自分が患者にとって性の対象になる場合があるということや化粧や香りが性的な刺激になると気づく学生もいた。しかし、患者の勃起に驚き、戸惑っても教員や臨床指導者に相談せず、

学生同士で話してその時の感情を処理していたが、実施直後に、教員や臨床指導者から助言を得たいと考えていた。

3. ミーティングの効果

1) 内容

実習終了後、教員 B からの働きかけで女子学生 4 人に対して男性患者の陰部洗浄実施による勃起についてのミーティングがもたれた。

2) 学生の発言

< 学生 A >

教員からこの話題に触れてくれるほうが気持ち楽で、こういう場を作ってもらえると話しやすいし、一人で嫌だったと考え込まず済むと思った。陰部洗浄した体験について気楽に意見交換できるとよいと思う。特に学生の心理的なことは、学生同士で共有することで自分だけではないという安心感が得られる。

< 学生 B >

勃起をみたことがないので、どこか他人事感で深くは考えられなかった。実際に体験していたら、このように話し合うことで対処しやすくなると思った。ミーティングの時にみんなで気軽に意見交換して自分だけでないという安心感を得たい。技術的な助言は、実施直後に受けたい。

< 学生 C >

陰部洗浄時、患者が勃起したことについて、個人的に助言されると自分だけが特別な体験をした感じがするけれど、ほかに体験した人がいると意見交換できるし、自分だけではないということで安心できる。ただ、グループの関係がよくないと難しいとも思う。

< 学生 D >

自分は年齢も高いせいか、教員もあなたはわかっているよねみたいな対応で、ほかの 3 人に話しかける感じだったので自分には関係ないという気持ちになった。教員が言っていることはわかったが、実際できるかはわからないと思った。

< 男子学生 E・F >

教員や臨床指導者のもっていき方が影響するので、堅苦しくならないように、ざっくばらんに話せばよいと思う。自分たちは女子学生と一緒に意見交換することに抵抗はないのでみんなで共有体験をすることはいいと思う。

3) 分析

ミーティングに参加した女子学生は、実施体験や勃起体験について話し合えたことで、方法についての理解が深まったことや勃起が特別なことではないと安心できたと感じていた。ただし、男性の陰部洗浄終了直後も教員や臨床指導者から技術的な助言を得たいと考えていた。また、今回は男子学生は話し合いには加わらなかったが、男子学生も加わり共に考えていくこ

とを望んでいた。ミーティングについては、堅苦しくならない気軽な雰囲気や先入観にとらわれず全員が意見交換できる運営を期待していた。

・男性患者の陰部洗浄に関する指導の効果

1. 男性陰部シミュレーションモデルを用いた陰部洗浄の事前技術指導

今まで学生は、男性患者の陰部洗浄の校内実習体験がない状態で、基礎看護学実習に臨み、受け持ち男性患者の援助に必要であれば、陰部洗浄をすることが求められてきた。しかし、ほとんどの学生はできるかどうか不安を感じながらも、実習前に学生から教員に技術指導を求めたり、練習することはみられなかった。その理由として、校内実習で男性患者の陰部洗浄を実施していないため、基礎看護学実習で実施するという実感がわきにくいことや羞恥心を伴う援助ということから指導を受けにくいことが推測できた。今回、男性陰部シミュレーションモデルを用いたデモンストラーションを希望者数名に実施したが、指導された方法や注意点を理解するだけでなく、自主的に練習し、真剣に取り組む姿勢がみられた。その結果、男性患者の陰部洗浄の実施方法に対する不安が緩和し、実習に臨むことができたと考えられる。また、学生は、男性の性器を日常の体験の中で見たり、触れたりすることは少ないことから、シミュレーションモデルを用いて練習することで男性性器に慣れることができ、抵抗感を軽減し、男性患者の陰部洗浄を実施する覚悟ができたと考えられる。

事前技術練習では、男性の性反応の特徴や勃起時の対応方法についても説明したが、学生にとっては、陰部洗浄実施中に高齢の患者が勃起することは知識としては理解できても、実際に自分が体験することは極めて少ないと認識していたため、そのことを踏まえた授業内容の見直しが必要であることが明らかとなった。

2. 実習における男性患者の陰部洗浄の体験

臨地実習において多くの学生は「基礎看護学実習で初めて陰部洗浄をするために男性性器に触ることの抵抗感と衝撃」、「性に関することでは陰部洗浄が一番気を使う」などの男性患者の陰部洗浄を初めて実施する時、緊張、抵抗感、嫌悪感、驚き、衝撃、羞恥心及び不安などの複雑な感情をもっている⁸⁾。しかし、今回の学生は、男性患者の陰部洗浄をすることに対して、患者に必要なケアとして、受け止めており、そこまでのネガティブで複雑な感情は見られなかったという事実が確認され、事前技術練習する効果が感じられた。ただし、臥床した状態ではなくポータブル便器に坐った状態での方法のように校内実習で学習した方法と異なるような状況においては、対応には戸惑うことが明らかになった。臥床した患者の陰部洗浄に比べ、ポ-

ータブル便器に坐った状況での陰部洗浄は、作業野も狭くなり技術的にも難しくなることや実施する学生の位置や姿勢が患者に性的な刺激を与えることも予測できることから、臨床指導者が実施するのを見学してから実施することが望ましいと考える。また、患者の自立を考えた時に患者自身で行うことが可能かを十分考えた上で学生が実施することが望まれる。

勃起を見たことがない学生は、陰部洗浄をしているときに勃起し始めていても気づかないことや気づいても初めての体験であると、知識があってもとっさにはどう対応してよいのか判断できない。そこで、患者に不必要な羞恥心を与えないためにも、その場面での教員や臨床指導者の適切な対応が必要である。例えば、学生が気づいていないときはさり気なく交代して、終了後、勃起したことの理由について説明することが挙げられる⁹⁾。

3. ミーティングの効果

男性患者の陰部洗浄実施時の勃起に遭遇した学生は、自分にだけ起こった特別な体験のように感じていた。しかし、ミーティングの中で勃起体験について素直な気持ちを出し合うことができたため、自分だけではないことが確認でき、安心感を得ることができたと考えられる。さらに今回の陰部洗浄の体験から学生は自分が性的な存在であることに気付いており、ミーティングが陰部洗浄のもつ意味について理解する機会となる可能性が見出された。教師や臨床指導者が、陰部洗浄時の勃起が生理的反応として起こることであり特別なことではないと個人的に話すことにより、楽になる¹⁰⁾こともあるが、今回のようにミーティングの中で学生が体験を共有することにより、安心できることがわかった。ただし、グループメンバーの人間関係や陰部洗浄の勃起体験が1人しかいないときには、自由な意見交換ができないこともあり、個人的に助言をしたほうが効果的な可能性も示されており、教員や臨床指導者は状況に応じた判断が求められる。

V. 男性患者の陰部洗浄に関する指導方法の提案

今回の研究において、看護基礎教育における陰部洗浄の指導方法を、学生の発言から検討した結果、学内における授業内容、臨床実習における指導内容、ミーティングのもち方について、以下のように提案する。

1. 男性患者の陰部洗浄の授業内容

1) 講義内容

- (1) 性器の解剖学的特徴・性反応(勃起)の特徴
- (2) 陰部洗浄を受ける患者の心理
- (3) 陰部洗浄の方法
- (4) 陰部洗浄時の勃起への対応方法
- (5) 陰部洗浄を実施する時の看護師の態度

2) 校内実習内容

- (1) 男性性器シミュレーションモデルを用いたデモストレーション
 - (2) 男性性器シミュレーションモデルを用いた実習時間の保障
2. 基礎看護学実習（臨地実習）における男性患者の陰部洗浄の指導内容
- 1) 教員又は臨床指導者の行う陰部洗浄の見学をしたのち実施し、実施後、技術的な指導と心理的なフォローを受ける。
 - 2) 臥床患者の陰部洗浄を体験していても、ポータブルトイレなど体位が変わる場合は、見学をしたのち、実施し、実施後、技術的な指導と心理的なフォローを受ける。
 - 3) 実施中、勃起することがあれば、教員や臨床指導者が交代し、終了後、技術的な指導と心理的なフォローをする。
3. ミーティングのもち方
- 1) 陰部洗浄の実施後に設定し、学生の気持ちについて意見交換しながら、事前学習を想起させ、陰部洗浄のもつ意味を考えさせる。
 - 2) 羞恥心を伴うテーマのため、学生が緊張せずに自由にディスカッションができる運営をする。
- 今回の面接調査は、1看護専門学校であったため、その学校の教育カリキュラムを反映した学生の実習体験であることの限界があるが、陰部洗浄の指導法とし

て1つの示唆を与えるものであると考える。

最後に、本研究にあたり、極めてプライバシーに関することにもかかわらず、面接調査の依頼に協力してくれた学生たちに心から感謝いたします。

文献

- 1) 厚生省健康政策局看護課編集：看護教育カリキュラム；21世紀に期待される看護職者のために，14，第1法規，東京，1988．
- 2) 厚生省健康政策局看護課編集：看護教育カリキュラム；21世紀に期待される看護職者のために，143-144，第1法規，東京，1998．
- 3) 高村寿子，松本鈴子，松本清一：看護教育における「性」に関する教育の現状と今後の問題，看護教育，32：731-743，1992．
- 4) 川野雅資，武田敏：看護と性 ヒューマンセクシュアリティの視点から，29-30，看護の科学社，東京，1998．
- 5) Nancy Fugate Woods: Human Sexuality in Health and Illness, 稲岡文昭，小玉香津子他訳，ヒューマンセクシュアリティ，臨床看護篇，日本看護協会，東京，214-215，1993．
- 6) 前掲書4)，29-30．
- 7) 水野昌子：看護基礎教育課程におけるセクシュアリティ教育に関する検討，30-31，2006，愛知教育大学修士論文未発表．
- 8) 前掲書7)，28-30．
- 9) 前掲書7)，30．
- 10) 前掲書7)，30．

（平成18年9月15日受理）